

國學院大學學術情報リポジトリ

初級日本語教科書における基本語彙の検討：
フィンランドで編纂された『JAPANIN
KIELI』の名詞を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本間, 美奈子, Homma, Minako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000362

初級日本語教科書における基本語彙の検討 —フィンランドで編纂された

『JAPANIN KIELI』の名詞を中心に—

本間美奈子

1. はじめに

非母語話者を対象とした日本語教科書には検定制度がないため、学習すべき語を網羅した語彙表や習得語数の標準は存在しない。したがって、教科書の編纂目的や編纂方針、教育対象者などの編纂事情によって学習語、語数は異なるものとなっている。初級段階の学習者に提示する基本語彙については、これまで多くの調査、選定が試みられてきた。調査資料、選定方法、選定語数に異同があっても、複数の選定結果を対照し、共通する語を抽出することで日本語教育汎用の基本語彙が選定できると考えられていた。しかし、『日本語教育基本語彙七種比較対照表』（以下『7種対照』とする）は、既存の語彙表7種を対照して語彙表間の共通度が低いことを明らかにしたうえで、「教育目的別・教育対象者別・専門別等に、基本語彙を設定する試みもなされるべき」と焦点を絞った基本語彙の選定を提案した。語彙表間の共通度の低さについて、中道真木男（1983）は次のような指摘をしている。

くい違いの大きさは、「初級」の範囲に対する認識の違いといったことほかに、(略)「基本度ではない基本性」の違いが十分に意識されないまま、漠然とした「凡用」基本語彙として提示されたものが多いためといえるであろう。

そこで本稿では、初級教科書の性格と構造に着目して選定方法を改善し、語彙表の作成を試みる。語彙表は品詞別に作成し、複数の教科書を対照して基本語を選定する資料とする。まず、今後実施する調査の条件を統一するために調査資料を、フィンランド語母語話者を教育対象とする初級教科書に限定する。次に、基本語の選定は、選定基準を設けたうえで品詞ごとに行うこととする。

初級教科書は文型・文法事項の導入、練習を中心に編纂されるため、収録語彙には学習に関連した構造がある。しかし、構造に留意した選定基準についてはこれまで十分に検討されてこなかった。中道真木男(1983)は、日本語教育においてある語が基本的であると判定されるためには、次のいずれかにあてはまらなければならないとして3点の基本性を示した。

- ①文型ステップ的基本性…基本文型を構成するために必要な語彙であること。助詞・助動詞、形式名詞、待遇レベル関係語彙などがこれに当たる。
- ②学習過程向基本性…教室内で基本的な文型の扱い方を学習する際に、適当な実例として文型の中に挿入して用いられるのに適した語であること。
- ③実用的基本性…学習者が教室外の実際場で接する日本語の中で多く用いられ、特に話題のキー・ワードとなることの多いものであること。

この3点を観点に初級教科書の名詞を概観すると、文型・文法を学習するために必要な形式名詞「こと」のような「文型ステップ型基本性」のある語(以下「文型基本語」とする)、および文型の中に挿入して用いられる「本」のような「学習過程向基本性」のある語(以下「挿入基本語」とする)は使用度数が高く、教科書間でもある程度の共通性があると考えられる。田中章夫(1984)は「高頻度語群に、調査資料の性格や話題が影響する」と指摘したうえで、「基本語となりうるような単語は、概して頻度が高いといえる。しかし、その逆は成立せず、頻度の高い語は、必ずしも基本語ではない」と述べている。これまでは高頻度語群から基本語を選び分けることが難しかったが、観点を加えることで文型基本語と挿入基本語を取り出すことができると考えられる。一方、「実用的基本性」のある語(以下「実用基本語」とする)は多様性があるため使用度数が低く、教科書間での共通性は低いと考えられる。このような予測が立つことから、基本語の選定基準として3点の基本性を導入することとした。

語彙表は五十音順、使用度数順とするのが一般的であるが、本稿では教科書を対照することを念頭に、『分類語彙表』によって語を意味別に整理した語彙表を品詞ごとに作成する。語彙表には使用度数を示し、選定基準と併せて基本性を判定する資料として活用する。実用基本語は、教育対象者の属性や文化的背景などに基づいて恣意的に選択される傾向があり、これが多様化に繋がり教科書間の一致度が低くなるという問題があった。たとえば、フィンランドで編纂された教科書には実用基本語として「フィンランド」が提示されている。しかし、「フィンランド」は、『7種対照』や日本語能力試験旧出題基準には含まれない。一方、「アメリカ」は、『7種対照』では2種の語彙表に収録されており、日本語能力試験旧出題基準の3級語彙表にも含まれている。これまでの選定方法では、教科書間の共通性や使用度数を根拠に「フィンランド」と「アメリカ」は異なる扱いとなっ

ていた。しかし、どちらも「地名」という概念を具体化した名詞の一例と捉えることができ、基本性を再考できる。

日本語教育の基本語彙については様々な考え方があがるが、本稿では日常生活における発信で使用頻度が高い初級語彙を基本語彙とする。フィンランド語母語話者に対する基本語彙の選定を目標に選定方法の改善を検討したい。今回の調査資料は、ヘルシンキ大学の非常勤講師Tadaaki Kawataがフィンランドで編纂した日本語教科書、市販版『JAPANIN KIELI (以下市販版を『JK』とする)』とする。まず、ヘルシンキ大学における日本語教育、『JAPANIN KIELI』の編纂過程を概観したうえで、調査結果を考察する。

なお、本稿では日本語学習のための図書を「日本語教科書」と呼ぶこととする。

2. 『JAPANIN KIELI』編纂の背景と概要

フィンランドにおける日本語教育は、アルタイ語研究者であり初代駐日フィンランド公使であったグスタフ・J・ラムステッドが、1937年にヘルシンキ大学で日本語講座を開いたことから始まる。ハリー・ハレーン (1987) は、初めて開講された日本語母語話者による日本語講座で、教材が問題になったことを次のように記している。

1941年2月に締結された³両国間の文化協定に基づき、日本政府はドイツ語を話す客員教授桑木努をヘルシンキ大学に派遣した。(中略) 桑木教授の日本語講座は当初多くの学生を集めたが、フィンランド語教材がなかったためにその数はたちまち激減した。

桑木努はフィンランド語を媒介語とする教材の編纂に着手したが、第二次世界大戦により講座は中断され、1944年9月の両国間の外交断絶によって、未完成のまま日本に帰国したということである。

第二次世界大戦後、1965年にヘルシンキ大学で小泉保による日本語講座初級コースが再開された。2007年12月に小泉保先生から筆者が受けた書簡では、『日本語四週間』を使用して約50名の受講生に講義したことが明らかにされている。その後1970年から非常勤講師による常設の日本語講座が開設されたが、ハリー・ハレーン (1987) によれば、Tadaaki Kawataは1970年から1974年、また1977年から1981年の2度にわたり日本語講座を担当している。1970年から1981年の間に講座を担当した非常勤講師はKawataを含め7人いるが、2年以上担当した講師はKawataのみである。Kawata以外の講師が使用した教科書、教材は明らかになっていない。

Tadaaki Kawataはヘルシンキ大学で日本語講座を担当するかたわら、内容の

異なる教科書を複数編纂している。出版年と出版者、構成、所収内容を観点で教科書を分類すると5期に分けることができる。それぞれの概要は次表のようになる。

表1：『JAPANIN KIELI』の変遷

	出版年	出版者	構成	課	ページ	所蔵図書館	参考
第1期	1972	ヘルシンキ大学	1部	24課	79ページ	国立図書館	フィンランド語を媒介語とする日本語教科書の嚆矢。
第2期	1973～1974	ヘルシンキ大学 (第1部・第2部) Tadaaki Kawata (第3部)	3部	全29課	全149ページ	ヘルシンキ大学 (第1部) 国立図書館 (第2部・第3部)	3部構成だが、出版者、所蔵図書館が異なっている。
第3期	1979	Tadaaki Kawata	不明	9課～14課	37～74ページ	国立図書館	分冊構成とみられるが、前後の分冊が確認されていない。
第4期	1980	Tadaaki Kawata ヘルシンキ大学	1部	35課	189ページ	国立図書館	表紙には「Department of Asian and African Studies, University of Helsinki」と記されている。
第5期	1981	Tadaaki Kawata	1部	35課	195ページ	国立図書館 市立図書館 ほか	市販化され、他大学でも教科書として使用された。

第1期『JAPANIN KIELI』はフィンランド語を媒介語とする日本語教科書の嚆矢である。市販化された『JK』は他大学の日本語講座でも使用されており、フィンランドの日本語教育史においては重要な教科書といえる。本間美奈子(2007)によれば、『JK』は日本語能力試験の文法旧出題基準4級の81%、3級の59%をカバーしており、初級教科書として一定の水準を満たしている。

『JK』の序文には、英語を主体とする教材が参考文献として示されている。

Let's learn Japanese. Nippon Hosokyo Kyokai 1970

Japanese for Today. Gakken 1973, 1978 (10th impression)

Geography of Japan. Nihongo Kyoiku Gakkai 1978

『JK』の後半部分には、吉田弥寿夫編集の『あたらしい日本語 (*Japanese for Today*)』所収の読解文「日本の行事」「日本の着物」「日本の芸能」が、紙幅に応じて調整されたうえで掲載されている。

3. 名詞調査の概要

『JK』の調査は次のような手順で行った。

まず、『JK』が絶版となっているため、調査に使用する資料をオウル大学図書館所蔵の『JK』第15版(2003)とした。『JK』は1981年に市販版が出版されて以降改定が行われていない。市販版が『JAPANIN KIELI』の最終版と見做されること、市販版には版による異同がないことの2点が調査資料の選定理由である。『JK』の目次は次のようになっている。なお、表中のフィンランド語訳は筆者が便宜的に行ったものである。

表2：『JK』の目次一覧表

課	ページ	15. Dai juu-go-ka - Nippon no tabemono	69
Alkulause (序文)	1	16. Dai juu-rokka - Tookyoo	73
0.1 Oikeinkirjoitus (正書法)	5	17. Dai juu-shichi-ka - Suiei	79
0.2 Äänteet (音韻)	5	18. Dai juu-hachi-ka - Natsu	84
0.3 Ääntäminen (発音)	5	19. Dai juu-kyuu-ka - Hokkaido	87
0.4 Kesto (母音の長短)	6	20. Dai ni-jukka - Nippon no geinoo	92
0.5 Paino (アクセント)	7	21. Dai ni-juu-ikka - Taifuu	96
0.6 Intonaatio (イントネーション)	7	22. Dai ni-juu-ni-ka - Irasshaimase	102
0.7 Ääntämisharjoituksia (発音練習)	7	23. Dai ni-juu-san-ka - Yuubinkyoku	107
0.8 Hiragana	9	24. Dai ni-juu-yon-ka - Byooki	112
0.9 Tervehdykset (挨拶)	10	25. Dai ni-juu-go-ka - Ryokoo	116
1. Dai ikka	11	26. Dai ni-juu-rokka - Kyooto	121
2. Dai ni-ka	14	27. Dai ni-juu-shichi-ka - Michi jun	126
3. Dai san-ka - arimasu to imasu	18	28. Dai ni-juu-hachi-ka - Shookai	131
4. Dai yon-ka - Kazoku	23	29. Dai ni-juu-kyuu-ka - Shootai	137
5. Dai go-ka - Nippon-go	27	30. Dai san-jukka - Asokazan	142
6. Dai rokka - Kazu	32	31. Dai san-juu-ikka - Nippon no koogyoo	147
7. Dai shichi-ka - Kaimono	34	32. Dai san-juu-ni-ka - Nippon no kootsuu	153
8. Dai hachi-ka - Tabako to sake	37	33. Dai san-juu-san-ka - Nippon no kyooikuseido	158
9. Dai kyuu-ka - Hizuke	41	34. Dai san-juu-yon-ka - Nippon no kudamono	164
10. Dai jukka - Jikoku	46	35. Dai san-juu-go-ka - Nippon no gyooji	170
11. Dai juu-ikka - Denwa	51	Viimeinen luku (最終課)	179
12. Dai juu-ni-ka - Basu	56	Persoonapronominit (人称代名詞)	181
13. Dai juu-san-ka - Hikari-goo	60	Verbin taivutustaulukko (動詞活用表)	182
14. Dai juu-yon-ka - Daigaku no natsuyasumi	64	Harjoituksien ratkaisut (練習問題解答)	184

次に、各課の本文、例文、練習問題文から原則として単純語を単位に名詞を抽出し、収集した。語彙表作成に語の意味を用いるため、収集対象は文中に提示された名詞に限定した。なお、『JK』の新出単語は文型や文章の後に置かれ、文中に使用された語が提示されている。本稿では発音練習として例示された語や、数

字、月、曜日のように一括して提示され、文中で使用されない語は調査対象としなかった。

さらに、収集した名詞に『分類語彙表』のコードを付与し、意味分野ごとに分類した語彙表を作成した。『分類語彙表』を使用することにより、語の意味階層が一望できる。また、教科書を対照する際に、同じ意味分類の語の異同を一望できるという利点がある。

『分類語彙表』のコードは「1.2340」のように整数と小数点以下の数字からなり、意味的範疇は広い概念から順に、類、部門、中項目、分類項目の4層構造になっている。本調査の対象である名詞は「体の類」となる。体の類は「抽象的關係」「人間活動の主体」「人間活動—精神および行為」「生産物および用具」「自然物および自然現象」の5部門に分かれる。部門の下位の中項目は合計43項目に分かれ、中項目はさらに細かい分類項目に分かれる。本稿の語彙表は部門ごとに名詞一覧の形で示す。分類項目では使用度数順に語を配置する。

なお、本稿の語彙表では紙幅の都合によりコードを提示しないため、一見すると中項目と分類項目に提示した名詞とが一致しない場合がある。たとえば、部門「1.4生産物および用具」の中項目に「1.43食料」があるが、分類項目には「1.4360薬剤・薬品」があり、語の中には「目薬」が含まれている。本稿では『分類語彙表』の上下概念の問題には立ち入らず、コードに従って分類することとする。

4. 調査結果と考察

本文、例文、練習問題文から抽出収集し、コードを付与した名詞の異なり語数は960語となった。部門ごとの語数は次のようになる。

抽象的關係	267語
人間活動の主体	255語
人間活動—精神および行為	181語
生産物および用具	149語
自然物および自然現象	108語

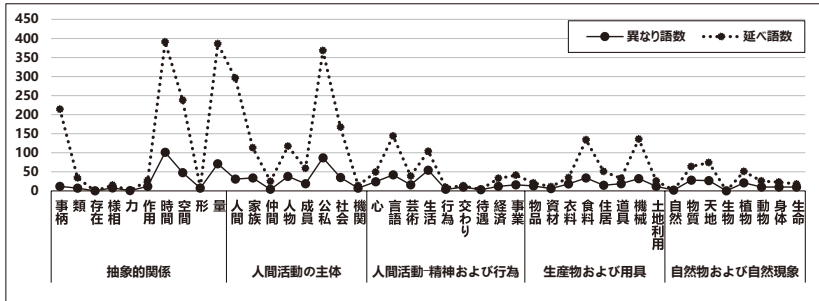
異なり語数960に対し、延べ語数は3615となった。初級語彙の目安として日本語能力試験旧出題基準を挙げると、語彙4級の名詞数は480語となっている。なお、旧出題基準4級語彙表には食べ物や飲み物、スポーツ、動植物の名称は含まれていない。『JK』と旧出題基準4級語彙表の名詞を対照したところ、共通する語は286語であった。

部門、中項目ごとの異なり語数、延べ語数をグラフにすると次のようになる。「抽象的關係」、「人間活動の主体」の延べ語数が多いことがわかる。

本稿では、調査結果を意味分野に整理した名詞一覧を語彙表として示す。表中の分類項目では、使用度数順に語を配置する。以下、部門ごとに調査結果を概観

したのち、特徴のある語を抜粋して基本性を考察する。

グラフ 1：部門ごとの異なり語数と延べ語数



4-1. 抽象的關係

「抽象的關係」の名詞267語は、名詞異なり語960語の27.8%を占めている。平均使用率の高い順に中項目を挙げると次表のようになる。平均使用率が3以上の中項目は、「事柄」「量」「空間」「類」「時間」の5項目である。特筆すべきことは「事柄」の平均使用率が17.8と突出していることである。

表 3：抽象的關係の中項目の語数

	事柄	量	空間	類	時間	作用	様相	形	力	存在	合計
異なり語数	12	71	48	7	101	12	8	7	1	0	267
延べ語数	214	386	238	34	391	27	15	9	1	0	1315
平均使用率	17.8	5.44	4.96	4.86	3.87	2.25	1.88	1.29	1	0	

表 4：抽象的關係の名詞一覧表

中項目	【分類項目】名詞・使用度数
事柄	【事柄】こと47 もの9、【こそあど・他】何46 これ35 それ18 あれ18 ほう14 どちら9 あちら7、【真偽・是非】本当7 実際1、【本体・代理】他3
類	【類・例】式2 種類1、【等級・系列】一番18 世界—1、【因果】原因4、【理由・目的・証拠】ため6、【異同・類似】ひとつ2
存在	【存在】N
様相	【様相・情勢】よう3、【趣・調子】気分2、【風・観・姿】風(ふう)1、【内容・構成】作り1、【特徴】普通4 特色1、【難易・安危】便利2 安全性1
力	【力】力1
作用	【作用・変化】変化1、【動き】運転1、【往復】おいで6 お帰り2 通勤1 通学1 来店1 お出かけ1、【乗り降り・浮き沈み】沈下1、【合体・出会い・集合など】集中1、【統一・組み合わせ】一緒10、【進歩・衰退】発達1

時間	【時間】間(ま)4 間(かん)3 時(とき)1 時間1、【時機・時刻】ころ10 いつ6 いつごろ1 いつか1、【毎日・毎度】毎日9 度5 一度5 毎年4 何度1、【期間】学期3 年間2 新学期1、【年記】二十歳1 年上1、【時代】時代5 明治2 近代1 原始1 平安1 鎌倉1 室町1、【季節】夏13 冬4 秋3 季節1 シーズン1、【年】年(とし)2、【月】正月2、【週・週日】日曜日9 土曜日6 金曜日4 曜日2 月曜日1 火曜日1 木曜日1 木曜1、【日】日(ひ)7 一日(いちにち)5 誕生日1、【節・節日】成人の日1 節分1 暮れ1 大晦日1、【朝晩】朝7 午後5 夜5 昼2 午前2 夕方2 正午1 夜中1、【現在】今日(きょう)31 今15 今年(ことし)9 今日(こんにち)4 今晚4 現在3 今週3 このごろ1 今朝(けさ)1 今夜1、【過去】昨日(きのう)13 最近4 昔3 タベ2 元1 旧1 さっき1 去年1 先月1 先週1、【未来】明日(あした)38 来週14 次8 来年4 来月2 今後1 これから1 明後日(あさって)1、【順序】先5、【終結】初め9 終り2、【終始】最後2 最初1、【途中・盛り】中(なか)7 途中1、【新旧・遅速】手遅れ1、【時間的前後】後(あと)7 今度7 後(ご)2 すぎ2 当時2 前1、【日程・日課】課程2、【場合】ところ3 時(とき)2
空間	【空間・場所】どこ41 ここ26 ところ18 あそこ12 売場7 そこ6 外3 住所3 各地1 場1、【範囲・席・跡】中(なか)7 地方3 地帯1 地盤1 席1 口座1、【境・間】間(あいだ)2、【方向・方角】行き11 こちら5 むこう3 東3 南2 南北2 北1 東西1 以南1、【左右・前後・たてよこ】前9 後(うしろ)4 右4 左3、【上下】上(うえ)11 下5 地下1 壇上1 上流1、【中・隅・端】角5 中心3 隅1、【面・側・表裏】斜面1、【内外】中(なか)6 中(ちゅう)2 国内2、【ふち・そば・まわり・治い】近く7 辺(へん)3 そば2 隣2 あたり1 沿岸1
形	【形・型・姿・構え】形2 型1 新型1 大型1 小型1、【穴・口】入口2 穴1
量	【値・額】人口2、【数】電話番号3 数2、【長短・高低・深淺・厚薄・遠近】背2 高さ1 高度1、【広狭・大小】面積2、【速度】スピード1 時速1、【角度など】震度1 湿度1 人口密度1、【程度・限度】以上8 以下2、【一般・全体・部分】半7 全部5 一部分1 半分1、【数記号(一二三)】いくら11 ふたり6 みっつ5 ふたつ4 いくつ4 やっつ2 ひとり2 二重2 ひとつ1 とお1 三日(みっか)1 五日(いつか)1 数年1、【順位記号(甲乙丙)】一日(ついたち)1、【助数接辞】時(じ)43 月38 何30 分(ぶん)22 本(ほん)21 年15 円(日本円)14 時間13 階12 人(にん)10 日(にち)10 枚(まい)6 前5 世紀5 歳5 キロメートル5 個5 番目4 目4 箱4 号3 秒3 パーセント2 番2 才2 年(学年)2 匹2 ドル2 週間1 メートル1 グラム1 キロ1 回1 冊1 ページ1 戸(こ)1 軒1 台1

表4を見ると、中項目「事柄」には形式名詞、指示詞が含まれており、これが「事柄」の平均使用率を押しあげていることがわかる。とくに形式名詞「こと」は使用度数が高く、47度であった。本間美奈子(2007)と対照したところ、文型・文法事項と語の使用度数に関連があることがわかった。たとえば、「こと」は第17課において文型・文法事項に関連付けられて導入されている。教科書の中ほどで扱われているにもかかわらず、練習問題や次課以降の本文で使用され習得が図られるため、使用度数が高くなっている。文型基本語は使用度数が高くなる傾向がある。また、教科書間で取り扱う文型基本語数に差異があるとみられる。

意味関連のある文型基本語でも、使用度数には差がある。中項目「空間」の指示詞は、初出は第2課であるが、第3課では「こそあど」の体系として示されている。主に質問と答えという組み合わせ文で用いられるため、不定称「どこ」が41度と多用されている。また、中項目「時間」に分類される「曜日」にも使用度数の差が見られる。練習問題をはじめとした文での活用のしやすさが使用度数に差を生じる一因となっていると考えられる。たとえば、予定を答えさせる文には、平日よりも「日曜日」、「土曜日」が用いられやすい。

4-2. 人間活動の主体

「人間活動の主体」の名詞255語は、名詞異なり語960語の26.6%を占めている。「抽象的關係」と「人間活動の主体」の2部門で、『JK』に提示されている名詞の2分の1以上を占めている。中項目を平均使用率の高い順に挙げると次表のようになる。平均使用率が3以上の中項目は、「人間」「仲間」「社会」「公私」「家族」「成員」「人物」の7項目となる。他の部門に比べ、中項目それぞれの平均使用率が高くなっている。

表5：人間活動の主体の中項目の語数

	人間	仲間	社会	公私	家族	成員	人物	機関	合計
異なり語数	31	4	35	87	34	19	38	7	255
延べ語数	296	25	167	368	113	59	117	14	1159
平均使用率	9.55	6.25	4.77	4.23	3.33	3.11	3.08	2	

表6：人間活動の主体の名詞一覧表

中項目	【分類項目】名詞・使用度数
人間	【人間】 人(ひと)21 人間2 人々2 一人(じん)1 一屋1、 【われ・なれ・かれ】 わたし104 あなた76 あの人37 おたく11 彼6 わたしたち5 誰3 みんな2 彼女2 どなた2 皆様1 皆さん1 彼等1、 【自他】 自分2 ひとりひとり1 それぞれ1、 【神仏・精霊】 神1、 【男女】 婦人3 女の子2 男の子1 紳士1 女1 女の人1、 【老少】 大人2 赤ちゃん1 年寄り1
家族	【家族】 家族1、 【夫婦】 奥さん4 夫人2 夫1 妻1 家内1、 【親・先祖】 父9 母5 おとうさん4 両親4 おかあさん3 母親2 おじいさん2 親1 おばあさん1 先祖1、 【子・子孫】 子ども20 息子7 娘5 お子さん3 お嬢さん2 子どもたち2 お子さん達2、 【兄弟】 弟7 妹6 おとうとさん3 妹さん3 兄弟2 兄2 姉2 おねえさん2 おにいさん1、 【親戚】 おじさん1 いとこ1
仲間	【友・なじみ】 ともだち22 ポーイ・フレンド1、 【主客】 主婦1 客1
人物	【人種・民族】 日本人14 フィンランド人4 アイヌ人2 アメリカ人2 先住民1 スウェーデン人(ママ)1、 【国民・住民】 国民2 外国人2 住民1、 【君主】 天皇陛下1、 【人物】 博士1 政治家1 旅行者1 患者1、 【固有人名】 佐藤10 太郎11 アールトネン8 まり子8 加藤6 鈴木6 マイヤ5 田中4 小林4 花子4 中村2 本多2 次郎2 川上1 佐々木1 木村1 松本1 島田1 中山1 山田1 小山1 藤田1 コルホネン1 お国(固有人名)1
成員	【成員・職】 従業員3 銀行員2、 【専門的・技術的職業】 先生13 技師2 医者2 看護婦1 牧師1、 【管理的・書記的職業】 車掌3 役人1 総理大臣1 文部大臣1 秘書1、 【農林水産業】 農家1、 【運輸業】 運転手3、 【学徒】 学生17 生徒1 高校生1、 【長】 社長4 部長1
公私	【家】 家(うち)23 家(いえ)6 おたく4 家庭2、 【郷里】 国(故郷)4 田舎1、 【国】 国(くに)2 外国2 全国2 国(こく)1 雪国1 島国1、 【都会・田舎】 都市4 都3 首都2 村2 大都市1 京1 農村1 繁華街1、 【政治的区画】 県2、 【固有地名】 町11 日本71 東京33 京都26 北海道14 フィンランド12 大阪10 九州9 富士山7 札幌6 奈良6 阿蘇6 太平洋4 中国(国名)4 四日市4 静岡4 銀座4 四国3 ヘルシンキ3 横浜3 新橋3 虎の門3 東北2 アジア2 シベリア2 朝鮮2 沖縄2 名古屋2 博多2 長野2 鹿児島2 長崎2 アルプス2 熱海2 日本海1 瀬戸内海1 本州1 東海道1 中部1 関東1 関西1 南極大陸1 チリ1 アメリカ1 シンガポール(国名)1 青森1 広島1 富山1 山形1 シンガポール(首都)1 クワラルンプール(ママ)1 香港1 摩周湖1 阿寒1 阿寒湖1 びわ湖1 桜島1 阿蘇山1 富士1 水俣市1 神戸港1 甲府1 鎌倉1 逗子1 出雲1 祇園1

社会	【社会・世界】世界9、【現場】改札口1、【社寺・学校】大学25 学校13 寺9 小学校6 中学校5 神社4 高等学校4 大学院2 高校2 中学2 短期大学1、【事務所・市場・駅など】銀行11 工場10 駅10 会社9 停留所2 社1 駐車場1、【店・旅館・病院・劇場など】店6 デパート5 レストラン4 ホテル4 病院4 公園4 プール4 商社2 喫茶店1 織屋1 バー1 図書館1 動物園1 劇場1 歌舞伎座1
機関	【政府機関】宮廷1 課1、【公共機関】郵便局6 国鉄2 私鉄2 税関1、【同盟・団体】コンビナート1

表5を見ると、「人間」の平均使用率が9.55で、前述の「事柄」に次いで高くなっている。「人間」に含まれる分類項目「われ・なれ・かれ」は人称詞であり、文型基本語といえる。「わたし」の使用度数は104度で、『JK』で最も多く使用された語であった。特筆すべきことは、三人称「あの人」が37度使用されたことである。「彼」の使用度数は6度、「彼女は」は2度となっている。性別が明確な語より、どちらでも使用できる語のほうが多用されている。フィンランド語の三人称には性差がなく、「hän」で男女ともに指示できるため、「あの人」の使用には違和感がないと考えられる。

中項目「仲間」は4語あるが、「ともだち」の使用度数が22度であるのに対し、他の3語はそれぞれ1度であった。『JK』において、「ともだち」は挿入基本語として多用されたと考えられる。

中項目「社会」では、「大学」「学校」の使用度数が高くなっている。『JK』は大学の日本語講座用に編纂された教科書であり、「大学」「学校」は実用基本語といえるが、使用度数の高さは挿入基本語として使用された結果と考えられる。このようにふたつの基本性をもつ語もみられる。

中項目「公私」の分類項目には「固有地名」がある。固有地名は、教科書の編纂方針、学習者を取りまく地理・環境、編纂時の社会情勢が反映される項目といえる。編纂地特有の固有地名として、「フィンランド」「ヘルシンキ」「シベリア」が挙げられる。教科書編纂当時は、シベリア鉄道が日本・フィンランド間の主な交通手段であり、実用性が高い名詞であったと考えられる。また、日本の情報が国外に十分伝わらない時期であり、教科書には日本に関する知識を深める読解文が収録され、多くの「固有地名」が取りあげられている。しかし、全ての地名が実用基本語であるとはいえない。日本の地名が多用される一方、フィンランドの都市名は「ヘルシンキ」にとどまっており、数の点で不均衡がある。

中項目「人物」には編纂地特有の実用基本語「フィンランド人」「スウェーデン人」がある。使用度数は「フィンランド人」が4度であり、「日本人」の14度とは差がある。使用度数のみを根拠に基本語を選定すると、「フィンランド人」の選定順位は低くなる。

4-3. 人間活動—精神および行為

「人間活動—精神および行為」の名詞181語は、名詞異なり語960語の18.9%を

占めている。中項目を平均使用率の高い順に挙げると次表のようになる。平均使用率が3以上の中項目は、「言語」のみであった。

表7：人間活動—精神および行為の中項目の語数

	言語	経済	事業	芸術	行為	心	生活	待遇	交わり	合計
異なり語数	42	12	16	16	4	24	54	3	10	181
延べ語数	144	33	41	39	9	49	104	4	13	436
平均使用率	3.43	2.75	2.56	2.44	2.25	2.04	1.93	1.33	1.3	

表8：人間活動—精神および行為の名詞一覧表

中項目	【分類項目】名詞・使用度数
心	【心】元氣8 たましい2、【飢渴・酔い・疲労・睡眠など】吐き気1、【感情・気分】機嫌2、【好悪・愛憎】親切4、【敬意・感謝・信頼など】信用2、【表情・態度】顔色1、【声】鳴き声1、【学習・習慣・記憶】勉強3 授業3 練習1、【研究・試験・調査・検査など】試験4 入学試験2 専攻1、【判断・推測・評価】特定1、【意味・問題・趣旨など】意味1、【学問・学科】言語学1、【原理・規則】法律1、【方法】方法1 仕方1、【制度・慣例】制2 正式1、【計画・案】つもり4、【見る】ご覧1
言語	【言語】日本語19 英語12 ロシア語3 フィンランド語2 フランス語1 スペイン語1、【名】名前6 金閣寺3 東京銀行2 セブン・スター2 修士1 帝国ホテル1 都ホテル1 電安寺1 平安神宮1、【文字】漢字2 字1、【合図・挨拶】信号2、【通信】手紙8 書留2 電話2 速達1 電信1、【伝達・報知】ニュース5 天気予報1 新聞1、【話・談話】話3、【問答】質問1 答え1 答案1、【宣告・宣言・発表】勅語1、【評判】評判1、【書き】記録1、【文章】卒業論文1、【文書】書類1 報告書1、【文献・図書】本37 新聞5 字引4 教科書2 雑誌1 辞書1
芸術	【文芸】小説19 【芸術・美術】絵2 工芸2 写真1、【音楽】音楽5 ジャズ3 歌3、【演劇・映画】映画7 能4 歌舞伎3 田楽2 散楽2 人形劇1 猿楽1 狂言1 文楽1
生活	【文化・歴史・風俗】伝統2 文化1 歴史1、【人生・禍福】公害4 被害4 豊作1、【労働・作業・休暇】夏休み11 仕事10 冬休み2 アルバイト1、【学事・兵事】卒業1、【食生活】ご飯6 朝ごはん3 食事2 飯1 昼ごはん1 昼食1 夕食1 タゴ飯1 晩ごはん1、【衣生活】服装3、【保健・衛生】パーマ1、【冠婚】結婚1、【行事・式典・宗教的行事】行事3 祭(まつり)3 お盆2 節句1 端午1 七夕1 除夜の鐘1 ひな祭り1 お水取り1 クリスマス1 七五三1 お祝い1、【遊楽】踊り1 ダンス1 羽根つき1 カルタ取り1、【旅・行楽】旅行6 観光1 ドライブ1 釣り1、【スポーツ】テニス2 スキー2 スケート2 スポーツ1 試合1 ゲーム1 柔道1 空手1 マラソン1 水泳1、【口・鼻・目の動作】息1
行為	【才能】上手3 へた3 馬鹿2、【用事】用事1
交わり	【交わり】つきあい1、【集会】運動会2 大会1 パーティー1 クラス会1、【応接・送迎】見合い1、【仲介】紹介2 自己紹介2、【約束】約束1、【戦争】第二次世界大戦1
待遇	【支配・政治】政治1、【教育・養成】義務教育2、【礼】失礼1
経済	【所有】普通預金1、【経済・収支】経済1 外国為替1、【需要】必要5、【資本・金銭】お金15 おつり2 金(かね)1 現金1、【価格・費用】値段3、【給与・料金・利子】給料1 家賃1、【取引引き】輸出1
事業	【事業・業務】職業3 営業1、【生産・産業】工業7 産業5 重工業(重化学工業)5 化学工業(重化学工業)4、【農業・林業】農業2 酪農1、【建設・土木】工事2、【運輸】交通3 鉄道3 輸送1 航空便1、【医療】注射1、【掃除など】大掃除1、【技術・設備・修理】技術1

表8の中項目「言語」には「日本語」のほかにも編纂地特有の「フィンランド語」^{ママ}「ロシア語」が見られる。これらは実用基本語といえるが、使用度数から見ると「英語」の12度に及ばない。英語は第二言語が話せるかどうかの肯定・否定文に用い

られており、挿入基本語と考えられる。なお、フィンランドの公用語のひとつであるスウェーデン語は『JK』に収録されていない。

中項目「言語」のうち、最も使用度数が高いのは分類項目「文献・図書」の「本」の37度であった。挿入基本語として多用されたと考えられる。「教科書」や「雑誌」のような具体的な語は使用度数が低くなっている。意味範囲が狭く具体的な語より、意味範囲が広く抽象的な語の方が挿入基本語として用いられやすいといえる。

4-4. 生産物および用具

「生産物および用具」の名詞149語は、名詞異なり語960語の15.5%を占めている。中項目を平均使用率の高い順に挙げると次表ようになる。平均使用率が3以上の中項目は、「機械」「食料」「住居」の3項目になる。

表9：生産物および用具の中項目の語数

	機械	食料	住居	土地利用	衣料	資材	道具	物品	合計
異なり語数	32	33	15	12	18	6	19	13	149
延べ語数	136	134	51	26	35	11	33	21	447
平均使用率	4.25	4.06	3.4	2.17	1.94	1.83	1.74	1.62	

表10：生産物および用具の名詞一覧表

中項目	【分類項目】名詞・使用度数
物品	【物品】品(一ひん)3 もの1 品物1、【持ち物・売り物・土地など】土産1、【産物】雑貨1、【荷・包み】小包2、【貨幣・切符・証券】お金3 切符3 切手2 金1 コイン1 寝台券1 小切手1
資材	【資材・ごみ】資源1 原料1、【紙】紙5、【燃料・肥料】石油2、【コード】しめなわ1、【飾り】門松1
衣料	【衣料・綿・革・糸】繊維1、【布・布地・織物】布1 布(きれ)1 織物1 西陣織1、【衣服】着物9 和服4 洋服3 服1 普段着1、【上着・コート】小そで2 十二ひとえ1、【下着・寝巻き】下着2、【帽子・マスクなど】帽子2、【ネクタイ・帯・手袋・靴下など】足袋(たび)1 靴下1、【寝具】寝台2 ベット1
食料	【食料】食べ物4 食料品1、【料理】寿司6 天ぷら6 料理4 味噌汁3 すき焼き3 日本料理1 ご飯1 刺身1、【米・ぬか・小麦粉など】米7 餅2 野菜2、【魚・肉】魚7 肉3 牛肉2、【調味料・こうじなど】塩1 味噌1、【菓子】ケーキ2 アイスクリーム2 チューインガム1、【飲料・たばこ】タバコ21 ビール19 酒18 ミルク3 ウイスキー2 飲み物1 コーヒー1、【薬剤・薬品】薬3 風邪薬2 飲み薬1 錠剤1 目薬1 ペニシリン1
住居	【住居】家5 住まい1、【家屋・建物】建物1 タワー1、【部屋・床・廊下・階段など】部屋8 サウナ4 寝室1 食堂1 教室1、【家具】机13 いす5 テーブル4 風呂3 たんす2 家具1
道具	【器・ふた】京焼1、【瓶・筒・つぼ・膳など】鉢子1、【袋・かばんなど】カバン4、【食器・調理器具】茶道具1 茶わん1、【文具】鉛筆4 万年筆1 ボールペン1 ペン1、【日用品】製品4 用品2、【刃物】刀1、【楽器・レコードなど】鐘1、【遊具・置物・像など】人形2 おもちゃ1 はにわ1、【札・帳など】ノート4 旅券1 薬書1
機械	【灯火】電気1、【鏡・レンズ・カメラ】カメラ17 スライド1、【電気器具・部品】テレビ10 ラジオ2 電話2 赤電話2 ステレオ1、【機械・装置】タイプライター2 機械1、【計器】時計3 腕時計2 目覚まし時計1、【乗り物(陸上)】バス21 電車14 車13 自動車7 ひかり(新幹線)7 タクシー5 新幹線5 汽車2 救急車1 列車1 地下鉄1 こだま(新幹線)1 急行1 エレベーター1、【乗り物(海上)】舟1 船1 船舶1 ボート1、【乗り物(空中・宇宙)】飛行機7

土地利用	【地類(土地利用)】庭2 国立公園2 耕地1 田1 水田1 古墳1、【道路・橋】道6 高速道路4
	橋4 近道2 道路1 トンネル1

表10を見ると、中項目「機械」「食料」には実用性が高い名詞が含まれている。しかし、分類項目を考察すると、時代性や分野の偏り、関連して学習させたい語が足りないなどの問題があることがわかる。たとえば、「機械」には現代では使用されない「赤電話」が含まれている。実用基本語の中には、重要性の変化によって語の入れ替えが起きる項目がある。

表9では「食料」の平均使用率が高くなっているが、教科書第8課で好悪を表す形容詞と組み合わせるとたばこ・酒が扱われていることが影響している。部門の中で最も使用度数の高い語は、「タバコ」「バス」の21度、2番目は「ビール」の19度、3番目は「酒」の18度となっており、タバコ・酒類が突出している。茶類は使用度数1の「コーヒー」のみであり、飲料には偏りが見られる。また、分類項目「調味料・こうじなど」には「塩」と「味噌」はあっても、砂糖と醤油は見られない。実用基本語は恣意的に選択される傾向があるため、意味分野にまとめて関連語を確認する方法は有効であるといえる。

編纂地特有の名詞としては、中項目「住居」に「サウナ」がある。しかし、部門全体を見ても日本の生活を中心にして名詞が選択されており、学習者が自らの文化や生活について発信するための名詞は「サウナ」以外含まれていない。とくに「衣料」は和装に関する名詞が多く、上着やセーターのような編纂国で有用性の高い名詞が提示されていない。また、中項目「道具」の分類項目「食器・調理道具」には実用基本語と考えられるナイフのようなカトラリー類が提示されていない。

4-5. 自然物および自然現象

「自然物および自然現象」の名詞108語は、名詞異なり語960語の11.3%を占めている。部門の中項目を平均使用率の高い順に挙げると次表ようになる。平均使用率が3以上の中項目は「自然物および自然現象」にはなかった。

表11：自然物および自然現象の中項目の語数

	天地	動物	植物	身体	物質	生命	自然	生物	合計
異なり語数	27	10	21	10	28	10	2	0	108
延べ語数	74	26	51	23	64	18	2	0	258
平均使用率	2.74	2.6	2.43	2.3	2.29	1.8	1	0	

表12：自然物および自然現象の名詞一覧表

中項目	【分類項目】名詞・使用度数
自然	【光】日当り1、【音】音1

物質	【 物体・物質 】末(まつ)2 廃液1、【 元素 】銅2 鉄2 窒素1 水銀1 メチル水銀1 カドミウム1、【 さび・ちり・煙・灰など 】煙1、【 空気 】空気2 大気1 亜硫酸ガス1、【 水・乾湿 】水6 廃水(排水)2、【 天災 】地震3 洪水2 山崩れ1 噴火1、【 気象 】気候1、【 風 】台風11 風4 強風1、【 雨・雪 】雨3 梅雨3 雪2 大雨1、【 天気 】天気1、【 火 】火1
天地	【 宇宙・空 】空1、【 天体 】太陽3 星1 地球1、【 地 】大陸2 陸地1、【 山野 】山10 火山7 火口4 活火山3 山々2 休火山2 平野2 頂上1 死火山1 原(げん)1 盆地1、【 川・湖 】湖4 川3、【 海・島 】島9 海8 列島1、【 地相 】産地2 国土1 林1 森1 鉱山1
生物	【 生物 】N
植物	【 植物 】木1、【 木本 】リング10 みかん9 ナシ5 モモ4 桜2 ぶどう2 柿2 パイナップル1、【 草本 】キャベツ2 大豆1 ニンジン1 ジャガイモ1 きゅうり1 スイカ1 麦1 玉ねぎ1、【 枝・葉・花・実 】花3 苗木1 果物1 さくらんぼ1
動物	【 哺乳類 】犬8 猫7 象2 鯨1 ざる1 馬1、【 鳥類 】うぐいす1、【 魚類 】たい2 まぐろ2、【 その他の動物 】貝1
身体	【 頭・目鼻・顔 】頭4 目3 喉2 顔2 □1、【 胸・背・腹 】おなか4 腹1、【 手足・指 】手2、【 皮・毛髪・羽毛 】髪の毛2、【 卵 】たまご2
生命	【 生理 】熱3、【 障害・けが 】けが1、【 病気・体調 】イタイイタイ病3 病気2 ぜんそく2 水俣病2 めまい2 健康1 風邪1 中毒1

表11を見ると、「自然物および自然現象」に含まれる名詞は、他の部門に比べて平均使用率が低いことがわかる。中項目「植物」「動物」「身体」「生命」には実用基本語が含まれているが、使用度数は高くない。その一方で、中項目「物質」「天地」には初級段階では難しい「廃液」「メチル水銀」「カドミウム」「亜硫酸ガス」、「活火山」「休火山」「死火山」のような名詞が含まれている。これらは日本に関する知識を深める読解文に提示されている名詞であるが、レベルの点で実用基本語とはいえない。

その一方で、中項目「身体」の分類項目「頭・目鼻・顔」には、実用基本語と考えられる「鼻」や「耳」が含まれていない。

部門の中項目には「色」もあるが、『JK』には1語も色彩関連の語が提示されていない。実用基本語の分野には偏りがあるといえる。

5. おわりに

本稿では、フィンランド語母語話者に対する基本語彙を検討するために、ヘルシンキ大学の非常勤講師Tadaaki Kawataがフィンランドで編纂した日本語教科書、市販版『JAPANIN KIELI』を資料として名詞を調査し、『分類語彙表』によって意味分野別に整理した語彙表を作成した。また、従来の選定方法を改善するために、3点の基本性を選定基準に加えた。考察の結果、『JK』の名詞には次のような特徴があることが明らかになった。

- ①文型基本語は、導入後に練習問題や次課以降の文章で習得が図られるため、使用度数が高くなる傾向がある。しかし、関連語を確認すると、文での活用のしやすさによって使用度数には差異が見られる。たとえば、空間の指

示詞では不定称「どこ」が用いられやすい。

- ②挿入基本語は、具体的で意味範囲が狭い語より、抽象的で意味範囲が広い語のほうが文に用いられやすく、使用度数が高くなる傾向がある。たとえば、「教科書」や「雑誌」に比べ、「本」の使用度数が高くなっている。
- ③実用基本語は、恣意的に選択される傾向があるため多様性がある。また、使用度数は総じて低い傾向がある。時代性や偏り、関連語の不足が見られる。たとえば、「赤電話」、「シベリア」のように編纂時期に重要であった語が収録されている。重要性の変化により、実用基本語は入れ替わりが起きやすいとみられる。飲料では茶類よりもタバコ・酒類が多用されており、偏りがある。また、身体を表す語群では「目」と「口」はあるが、「鼻」と「耳」は提示されておらず、関連語には不足がある。

意味分野別に整理した語彙表を作成し、選定基準を設けたことで、初級教科書の構造から生じる名詞の基本性の違いを明確に示すことができるようになった。本稿の改善策は資料の性格と構造に適した方法であり、妥当であったといえる。初級教科書における使用度数は、挿入基本語と実用基本語とを分ける観点にはなるが、必ずしも基本語としての重要性を表すものではない。たとえば、使用度数14度の「日本人」と4度の「フィンランド人」とでは使用度数が高い語がより基本性が高く、重要な語であるとは言えない。

選定基準は、本来は複数の教科書を調査して得た語彙表を対照して基本語を選定する際に活用するものである。しかし、本稿の考察から、最終的な選定を行う際に配慮すべき点が得られた。文型基本語の数は教科書で取り扱う文型・文法事項の数に連動しており、教科書間では語数に差異があるとみられる。他の教科書と対照する際には、この点に留意したい。

意味分野別に整理した語彙表には、関連語、類似語を一覧できるという利点がある。実用基本語は恣意的に選択される傾向があるため、単語そのものではなく、基本性の高い意味分野を確認する必要がある。

一方、選定基準の問題点も明らかになっている。実用基本語の中には挿入基本語として多用されるものがあり、選定基準によって明確に分けられない場合がある。このような二重の基本性をもつ語の分類の仕方や最終的な語彙表で基本性の違いをどのように示すかについては、教科書を対照しながら検討して行きたい。

今回は紙幅の都合で部分的な検討に止まった。今後は『JK』の調査結果とフィンランド語母語話者を教育対象とする他の日本語教科書とを対照し、基本語彙の選定を進めて行きたい。

【調査資料】

Tadaaki Kawata (2003) *JAPANIN KIELI* 第15版 Japanilaisen Kulttuurin Ystävät ry

【引用文献】

- 国立国語研究所(1982)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』大蔵省印刷局 pp.1-12
 田中章夫(1984)「基本語彙と基本語」『日本語学』3-2 明治書院 pp.28-38
 中道真木男(1983)「日本語教育の基本語彙とその辞書」『日本語学』2-6 明治書院 pp.72-78
 ハリー・ハレーン(1987)「フィンランドの日本研究」『ヨーロッパにおける日本研究』国際交流基金 pp.101-111
 本間美奈子(2007)「フィンランドの日本語教科書『JAPANIN KIELI』の文法項目の検討—「日本語能力試験3級・4級出題基準(文法)基礎資料」との対応から—」『國學院雑誌』108-9 國學院大學 pp.1-13

【参考文献】

- 植村友香子(1995)「ヘルシンキ大学の日本語教育」『第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集』第8回日本語教育連絡会事務局 pp.229-230
 小川芳男・佐藤純一(1963)『日本語四週間』大学書林
 押尾和美・秋元美晴・武田明子・阿部洋子・高梨美穂・柳澤好昭・岩元隆一・石毛順子(2008)「新しい日本語能力試験のための語彙表作成にむけて」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号 国際交流基金 pp.71-86
 国際交流基金(2002)『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社
 国立国語研究所(2004)『分類語彙表-増補改訂版』大日本図書
 ジョジョック・スバルジョ(2003)「日本語教育基本語彙と『みんなの日本語』」『国際シンポジウム比較語彙研究IV』語彙研究会 pp.54-69
 田島毓堂(1999)『比較語彙研究序説』笠間書院
 広瀬英史(2003)「基本教育語彙の意味領域」『国際シンポジウム比較語彙研究IV』語彙研究会 pp.42-53
 宮地裕・甲斐陸朗編(2008)『「日本語学」特集テーマ別ファイル普及版 語彙1』明治書院
 矢沢理子(1993)「ヘルシンキ大学」『第6回日本語教育連絡会議総合報告書』第6回日本語教育連絡会事務局 pp.51-53
 吉田弥寿夫編集(1973)『あたらしい日本語 (Japanese for Today)』学研
 林玉恵(2010)「日本語初級教科書における語彙調査の結果とその問題点—台湾で使用されている教科書を中心に—」『語彙研究』8号 語彙研究会 pp.45-54

【謝辞】本稿は平成28年9月17日に実践女子大学で開催された「2016年語彙研究会大会(第14回大会)」での口頭発表をもとに修正を加えたものです。会場にて貴重なご指摘・ご教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

本稿は平成27年度公益信託田島毓堂語彙研究基金の研究成果の一部です。